

ちょっとひとこと3

「もっと話がしたいー吃音克服への道のり」

NHKの教育テレビで、もうだいぶ前になるのですが(3/3)、海外ドキュメンタリーとして、カナダの吃音者を取りまく状況が報道されていました。あちらでは、またぞろ素因論が復活し、かつ、吃音を治すー障害の克服ということがつきだされているようです。この番組のひどさは、素因論の中身が何もだされず、また、「吃音は治るのだ」と断言されているのですが、具体的なことが何も示されていないことにも示されています。まるで宗教番組です。そもそも素因論自体が、認識論的な根拠を問われるのですが、この素因論が出てくるのは、単に吃音者だけの問題でなく、自閉症や精神障害者などにおいても、最近とみに素因論がもちだされて来ているようですし、障害者全般を取りまく状況として押さえておく必要があるとも思います。

兎も角、今日、「障害個性論」ー「障害関係論」が出され、一定の市民権をえてきている中で、なぜ、今頃この「障害の克服」ということがつきだされるのでしょうか

以前から、テレビで障害者を題材にしたドキュメンタリーやドラマは、お涙頂戴式の、努力して障害を克服する障害者の姿でした。障害者はもうずっと前から、同情というのは差別であると喝破し、批判してきたのですが、映像作家たちのほとんどは、この式の描き方から抜け出せないようです。

努力して障害を克服する障害者像を突き出すというのは、障害者への差別的な役割期待です。障害者が健常者よりも努力が必要とされるならば、そこに差別があるということを示していますし、障害者にそのような像が押し付けられる、オルタナティブにありえないということ、これこそが差別であり、また、完全に「障害」を無くすことができないとしたら、同化自体が、自己の存在を否定することにつながるからです。ここで、「どもりが治るか治らないか」という論争に棹さすつもりはありません。どちらにしても、吃音者が現代的にいて、将来的に一〇〇%いなくなるということが考えられない以上、「吃音の克服」へ努力するということを押し付けるような取り上げ方は差別であり、そのような番組を公共の電波を使って放送するという事自体を問題にしていかなばなりません。吃音者を主題にした番組を取り上げる時に、当事者でなければとらえられない問題があるはずで、吃音者の意見が取り入れられるシステムを作らねばならないと思います。もっと、社会的に発言し、力をもった吃音者の団体を作り上げていく必要があると、今回痛感しています。